

学校のバザーで、ウガンダから届いた携帯ストラップを販売する6年生たち



常盤小学校の廊下に張られた「ウガンダ通信」。河地さんは、ほかの隊員の活動も紹介してくれた

08年秋からは、今度は児童たちが力を合わせて自分たちでできることを考え、動き始めた。そのころ、資金的な理由で存続の危機に陥っていたビクトリア小学校を守るうと、河地さんと子どもたちが、資金づくりのため、現地特有のビーズを生かした携帯ストラップを作っていた。それを知った常盤小学校の児童たちは、現地から約400本ものストラップを送ってもらい、学校でのバザーや、さいたま市が主催する小学生のための起業家体験事業の場などで販売。見事完売し、その利益を現地に届けた。こうした支援のおかげで、ビクトリア小学校は危機を免れ、校舎の修復もできた。きれいな校舎とうれしそうなお子どもたちの様子に、常盤小学校の

6年生も大喜びだった。別所先生は「ビクトリア小学校との1年間の交流を通し、モノが豊かな生活の中で忘れがちな大切なことに、6年生たちは気付いたようです。それは、「今あるものに感謝する気持ち」や「人を自分のことのように思いやる気持ち」。ウガンダの子どもたちが、「モノがある＝幸せ」ではないと教えてくれました」とほほえむ。2月中旬、常盤小学校では、「世界の平和と日本の役割」を学ぶ社会科の授業が行われていた。「貧困」「エイズ」「紛争」「地球

温暖化」……。世界各地で起きているさまざまな問題に対し、「今はまだ力が足りないけれど、飢えや病気に苦しむ人々がいると『心に思う』ことがまずは大事だと思ふ」と一人の児童が言った。ウガンダとの交流から「広い世界への想像力」と「人を思う心」の大切さを学んだ常盤小学校6年生たち。中には、いつか河地さんのように協力隊として活躍したいという児童も多い。彼らが世界に羽ばたく日が楽しみだ。

※公立学校や国立大学付属学校の教員が現職の身分を保持したまま青年海外協力隊に参加できる制度。

が交流したり、ウガンダにしていることを疑似体験できたり、参加しながら国際理解が深められるような内容を心掛けた。遠い国から届く珍しい便りとあって6年生たちの反応は良く、感想を返送するなど、活発なやりとりが続いた。ビクトリア小学校では、HIV／エイズで親を亡くした子どもが多く、生活も貧しい。校舎はぼろぼろで電気も通っていない。それでも、勉強できることを喜ぶ彼らの笑顔は、日本の子どもの心を大きく揺さぶった。

「受験や偏差値のための学習にとられていた6年生が、河地先生から届く生きた情報によって、本当の『学び』を得ることができました」と別所先生は話す。夏休みには、別所先生が「みんなの代表」として現地を訪問したことで、児童たちにはウガンダがより身近な存在となった。



夏休みにウガンダの河地さんを訪ねた別所先生。「人と人とのきずなの強さや、今あるものに感謝できる精神的な豊かさがあった」

地球号の子どもたち 第6回



(右)ウガンダとの交流を通して6年生が成長する姿を見守ってきた別所先生。「交流は、『考える』ための授業を行う上でも大事な役割を果たした」と話す (上)体育の授業をする河地さん。ビクトリア小学校では、先生同士が指導法を学び合う授業研究会や、学校に寄宿するエイズ孤児への生活指導も行った



# ウガンダとの交流から学んだこと

さいたま市立常盤とこ小学校の6年生が、アフリカ・ウガンダの小学校で活動する青年海外協力隊員との交流を通し、世界の広さ、異なる環境に住む子どもたちに思いをめぐらせた。彼らは何を学び、何を感じたのだろうか。

**本当の「学び」を教えたウガンダからの便り**

「オリアチャ？(元気?)」

「ウエバレニヨ(ありがとう)」

埼玉県庁に程近い常盤小学校6年生の教室の壁には、ウガンダのいろいろな言葉が張られている。その横には、子どもたちと笑う一人の青年海外協力隊員の写真が並ぶ。

「これは、常盤小学校の6年生とある協力隊員との交流の印です」と別所純子先生が紹介してくれた。その隊員とは、さいたま市立大宮小学校教員の河地洋明かちひろさん。以前から別所先生と親交があり、JICAの現職教員特

別参加制度※を利用して2007年6月から09年3月までウガンダで活動した。「アフリカで子どもたちを教えた」という学生時代からの夢をかなえ、ムコノ県チティゴマ村のビクトリア小学校で、算数や体育を教えたり、教員の指導法についての助言などを行ってきた。

河地さんは、大宮小学校と、ウガンダ行きを応援してくれた別所先生のいる常盤小学校の6年生に、「現地の暮らしや子どもたちの様子、自分の活動から何かを学んでほしい」と、08年4月から毎月「ウガンダ通信」を送った。「情報提供だけでなく、紙面を通じて両国の子どもたち